

海住山寺総合調査報告 (2)

美術工芸研究室・歴史研究室

海住山寺よりの依頼による調査で、昭和49年の総合調査の後を受け、昭和51年度にその未了部分の調査を完了した。その調査目録は別途仮目録として印刷に付したが、ここではそのうちの主要なもののみを取り上げて紹介解説する。なお今回は奈良国立博物館菊竹淳一・阪田宗彦、大和文華館吉田宏志氏の御協力を頂いた。

1. 絵画

○両界曼荼羅図(絹本着色) 2幅 室町時代 (金剛界) 縦112.8cm, 横98.2cm (胎藏界) 縦112.3cm, 横99.8cm

鮮やかな濃彩に、金泥盛り上げ彩色を用いた作品である。図像的な厳密さを失いつつ、現図曼荼羅系の図像に従っている。糊離れこそ著しいが、本地の保存は良好で、その巻留に「南都芝野林□筆」とある。この巻留墨書はにわかには信じがたいが、派手な彩色と弛緩した肢体の表現などその作風から見て、南都仏画であることは間違いない。室町時代末頃の南都での製作と考えられる。

なおこの他海住山寺には、紙本着色両界曼荼羅図(江戸時代)、絹本着色金剛界曼荼羅図(江戸時代)、紙本木版下図彩色両界曼荼羅図2組(江戸時代—うち1組は天明5年?)などが伝わっている。

○浄土図(兜率天曼荼羅図)(絹本着色) 1幅 鎌倉時代 縦177.0cm, 横205.2cm

やや横長の大幅の浄土図で、画面の両側に斜め奥にのびる楼閣の浄土を対置して描き、その間を大きく宝池としている。池の中央には舞楽段が設けられている。左右の両浄土では楼閣の中に如来がおり、多くの菩薩が圍繞している。当麻曼荼羅図などの阿弥陀浄土図とは全く構図を異にし、むしろ弥勒の兜率天浄土図に近い。弥勒上生経に基づいて弥勒が上生した兜率天における四十九院の微妙宝宮を描くものである。兜率天曼荼羅図は、大阪延命寺本(既調査済)などが知られており、それによれば明らかに本尊は未だ菩薩である弥勒として描き、宝宮の四門や宝幢が加えられ、弥勒浄土であることを示している。しかし本図においては2つの浄土共その本尊は如来形をなし、弥勒浄土としての明徴を認めがたい。一方釈迦と阿弥陀の浄土と見て、造仰の浄土図とも解されるがこれも確証はない。しかし他に類例のない浄土図としてその図像的な検討はなお今後の研究に俟ちたい。本図は後世の補修が多く、著しく画面を損ねている。補絹、補彩はもとより、大部分に補筆が入っているが、うぶな部分には柔軟な暢達な描線によって変化に富んだ自由な肢体の表現が認められる。鎌倉時代中期の製作になると考えるのが穏当であろう。(口絵参照)

○十一面観音来迎図(絹本着色) 1幅 室町時代 縦101.8cm 横37.5cm

白雲に乗り大海原を越えて来迎してくる独尊の十一面観音を描く。独尊で立像の十一面観音

来迎図は東大寺本（既調査済）など数点知られており、南都系十一面観音来迎図として一括することができる。いずれも南都における観音信仰の所産と見られている。右手を施無畏とし、左手には蓮華を挿した水瓶をとり、十三条の放射光の頭光を負い踏割の蓮華に立っている。暗寒色系の鈍重な色彩は室町時代仏画に通有のものであり、切金・金泥による衣の文様や波の描き方にも形式化が著しい。室町時代後半の製作と考えられる。

○釈迦三尊十六羅漢図（絹本着色） 3幅 南北朝時代（建武5年） 中幅縦150.3cm，横80.5cm，右幅縦151.4cm，横68.8cm，左幅縦150.5cm，横68.8cm

釈迦三尊の幅と各々八体ずつの羅漢を描いた左右幅とで三幅対をなす。中幅は、大きな挙身光を負い結跏趺坐する金身の釈迦と、その左右にそれぞれ獅子・象に騎乗する文殊・普賢の三尊を描く。獅子の手綱をとる優填王と、象使いが描き加えられていて注目される。この釈迦三尊は岡山頼久寺の釈迦三尊図の図容に細部まで一致する。一方左右幅の十六羅漢は侍者を伴って山中に配され、その図像は京都天寧寺の十六幅本の羅漢図の中より主として選びながら、他の系統の羅漢をも混え相当異種交配した十六羅漢を構成している。中でも渡水羅漢を描き、図像的に注目すべき点がある。南北朝時代に特有の重厚な作風で、殊に岩の描法に用いられている輪郭線や点苔、岩の側面の墨のぼかしによくその様式的特徴を表わしている。本図は裱背に三幅共略同文の旧裏書を貼布しており、それによれば建武5年摂津国河辺南条難波村字新別所において開眼導師円如上人、発願勸進僧了阿によって供養され、図絵執筆は法印円順と知ることができる。様式的に見ても建武5年の製作と考えてよく、製作年代と筆者の明らかな南北朝時代仏画の基準作例として貴重な作品である。

○地藏十王図(絹本着色) 11幅 元時代 地藏図縦101.9cm,横47.8cm,十王図縦99.0~105.0cm,横44.3~44.7cm

いわゆる陸信忠様とされる地藏・十王図に属し、地藏の図像は岡山宝福寺の地藏に、十王図は京都大徳寺の十王図によく細部まで一致する。そのいずれもが元時代とされており、本図も落款・印章は見当たらないが、陸信忠様式の特徴を遺憾なく伝えている。暗寒色の賦彩とくせの強い描線によって緊密な画致を表わしており、日本での転写本と見るより、元画と解すべきであろう。陸信忠様の地藏・十王図は他に滋賀永源寺本などがあり、それらの図像を比較すると、いずれも相互に図柄を反転したものや、前面の地獄の部分や背後の添景物を変化させたものなど、基本的には数少ない図像を巧みに利用していることが知られる。又当然同図柄の作品も幾組も作られて舶載したことが予想される。本図も先の宝福寺本・大徳寺本に略同大であり、そのような作例の一つと考えてよい。

2. 書 跡

1975年度年報の調査報告(1)では、調査未了であった「大般若経」について報告する。

○大般若波羅蜜多経 (自巻第1 至巻第600, 内巻第6欠) 599帖

紙本墨書, 平安時代寛治頃写(但巻第146, 253, 278, 279, 476, 477, 478は鎌倉時代補写, また巻第181~200は春日版版本), 折本装(卷子本改装), 料紙黄斐紙(格交り), 墨界線

[法量](巻第1) 縦23.0cm, 横8.2cm, 45折半, 一紙長52.7cm, 界高19.8cm, 界幅1.6cm

「大般若経」600巻のうち、巻第6を欠くほか599帖現存し、各100帖が杉材の経箱6個に納められている。経箱は被蓋で中籠10段重ねであり、底内面などに「山州相楽郡瓶原郷/海住山/観音堂常什物」「宝永五曆戊子九月吉辰修補」(ノは改行を示す)と墨書され、「龍」「虎」など六獣の整理墨書が付されている。

この大般若経は本来卷子本であったのが折本装に改装され、経箱と同じく江戸時代宝永5年(1708)頃に海住山寺一鷹の摩尼珠院光賢等が行なった修補のときの白茶地に朱二重曼法相華唐草文を木版刷した表紙(題簽中央)を有している。なお改装時に、旧表紙を後補表紙下貼りに転用しており、一部には外題を存するものもみられる。その旧表紙には丁子散しと渋引きの2種あるが、外題の筆跡等からみて、それぞれ南北朝および室町時代のものと思える。後補表紙下貼りには、また巻尾軸付部を切断転用したものもあり、それには奥書の残っている場合もあるが、その奥書はおおむね別巻のものと考えるのがよからう。

ところで書写年代は、数巻の補写経と南北朝期摺写の春日版版経を除いて、筆跡・料紙等からみて院政期のものと考えられるが、奥書に「寛治六年七月四日書写已了筆師僧快連^(別筆)『滝尾山之経也』」(巻第54)のごとく、寛治6年(巻第54・112等17巻)・7年(巻第303等7巻)・8年(巻第495の1巻のみ)など、寛治6(1062)~8年の年紀をもつ書写奥書がみえることから、その時期に書写されたとみるのが妥当であろう。また巻第494の奥書(年紀なし)によると、滝尾寺住僧範誓を願主として、その勧進のもと近隣の結縁衆の助成をえて、写経が遂行された

ことがしられる。僧範誓は範与ともかかれ、寛治頃の人である(巻第497)。結縁衆には河内讃良郡山家郷や摂津西成郡柴嶋村の住人がみえ、在地領主が「現世安穩後世菩提」「息災延命増長福寿」等を祈念して、結縁衆やその縁者自ら、或はまた僧に依頼して大般若経を書写し、滝尾寺に奉獻したものであろう。料紙に黄色のほか、淡褐・濃褐色のがあることや、筆跡に10巻まとまって同筆のものがある反面、1巻数筆でかかれているなど一様でない。なお奥書には、「滝尾寺之経也」(巻第38等)、「滝尾寺」(巻第316等)、「滝尾寺之本」(巻第336等)のみのものもみられるが、これは書写よりやや降る院政期頃の筆と考えられる。滝尾寺については未詳であるが、四條畷市南野(旧河内讃良郡甲可村南野)の竜尾寺がその付近の清流・滝畑などの地名により関連があるのでないかと思われる。以後滝尾寺に伝わったであろう当経は鎌倉時代を通じて、破損巻首尾の補写(巻第18等)、欠失巻の補巻がなされている。

ところが南北朝期にはいと、巻末補写の場合には「暦応貳年七月廿五日 於天神宮書写畢」(巻第405)とか、修補のときには「暦応貳年^{壬午}七月廿三日之修復／岸和田天神宮御経也」(巻第447)の修補奥書を認めたものがでてくる。また「岸和田庄御経也」(巻第347等)とのみ記したのも数巻あり、これらも南北朝期筆と考えられるが、このことから、この大般若経は暦応年間(1338—42)には滝尾寺から岸和田庄の天神宮に移されていたことがしれる。岸和田庄は鎌倉から南北朝期にかけて妙法院文書に新日吉社領とみえる茨田郡にあった庄園(現門真市岸和田)であろう。やや時代が下る(応永頃)奥書に「河内国讃良郡八箇所岸和田佐多宮常住也(下略)」(巻第600)とあるが、もしこの岸和田佐多宮が天神宮と同じだとすると、現守口市佐太(旧茨田郡庭窪村佐太)にある佐太神社がこれにあたることになる。佐太神社もまた菅原道真を祀る社である。讃良郡岸和田佐多宮とあるのが問題であるが、他巻にも「河内国讃良郡岸和田庄於天神宮／書写畢」(巻第167)とみえ、岸和田庄域が兩郡に跨がっていたか何かで、讃良郡岸和田とかかれたのであろう。しかし岸和田と佐太神社とは若干距離があり、また岸和田に菅原神社という社があることからみて天神宮すなわち佐太神社とは断言はできない。滝尾寺から天神宮に移った時期は、もし次の奥書「岸和田／『滝尾寺之本』／^(別筆、院政期)庚午年歳奉渡也」(巻第336)を関連ありとすると、元徳2年(1330)かと思えるが、なお検討を要する。

南北朝から室町前期にかけて当経が天神宮にあったことは、巻第1, 100, 300, 400, 500, 600の巻末に、応永年間天神宮・常法寺での真読を記した裏書があることでしられる。その後天文年間の校合や、室町後期に巻末に梵字真言(光明真言等三種)がかかれるなどのち、春日版経20巻が補巻され、江戸時代にいたり海住山寺に入ったと思われ、室永年間に修補が加えられたのは前述のごとくである。海住山寺では「十一面観自在尊宝前什物」「観音宝前什物」として本堂(観音堂)に安置され、月次転読などに用いられていたようである。

なお、墨書校合には書写時のもののほか、以後鎌倉一室町にかけて数種あり、また鎌倉後期・室町前期2種の墨書仮名(字音)が少々付されている。(百橋 明穂・綾村 宏)

